北海道がんセンター通信

2008.6 第3号 SPRING

CONTENTS

●新院長挨拶　院　長　西尾　正道 … 2
新副院長挨拶　副院長　近藤　啓史 … 3
●各科トピックス「緩和ケア診療科／精神保健科」
緩和ケア診療科医長　松山　哲晃 … 4
●看護職者と研鑽について　看護部長　小川ひろみ … 6
●セクション紹介「外来」　外来看護師長　相生　洋子 … 7
●新任スタッフ紹介「がん相談支援情報室」 … 8
●治験あれこれQ＆A　治験管理部治験主任　高橋　知宏 … 9
●院内行事 … 10
●診療科別外来担当医師一覧表 … 11
●編集後記　副院長　近藤　啓史

北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼のある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。このため、

1 常に、医療の質と技術の向上を目指します
2 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します
3 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します
4 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります

北海道がんセンター
院長　西尾　正道

新院長挨拶

4月より院長を拝命した西尾です。当院は第3次救命救急センターを併設しつつ、がん診療を中心として歩んできました。しかし平成22年3月に北海道医療センター（現：西札幌病院）のオープンが予定されており、それに伴い当院の3次救急救命部門が移転します。この診療機能の変更に伴ない、当院のあり方や方向性に関しては重要な時期を迎えております。しかし当院はがん診療を中心とした病院であることには変わりはありません。

昨今、がん診療の均てん化が叫ばれ、がん診療体制の大きな見直しと再構築が行われています。そして団塊の世代が高齢化し、がん患者さんの増加が予測されていることから、今や国民病とも言えるがんの診療はますます重要となってきます。こうした現状の中で、当院は北海道のがん診療連携拠点病院の一つとして、より一層のがん診療の充実を目指しています。さらに道内のがん診療の中心的な立場に立ち、道内のがん診療の質の向上に寄与したいと考えております。

昨年6月に発表された「がん対策推進基本計画」により、今後の日本の中・長期的ながん診療の方向性が示され、また幾つかの具体的な数値目標が掲げられ示されました。

そこでは、未成年者の喫煙を無くし、がんの予防に努め、現在15％以下の検診率を50％まで上げて、がんの早期発見により、がん死亡率20％減少が目指されています。そしてがん医療の現場では、放射線治療や抗癌剤治療の専門医の育成と、治療の初期段階からの緩和ケアの実施などが重要な課題として挙げられています。またがん登録を推進し、今後のがん対策の基となる資料収集に政府として乗り出す姿勢が打ち出されています。その他にがん医療に関する相談支援や情報提供体制の整備も掲げられています。

そしてこうしたがん診療を中心的に担う施設として、約360の2次医療圏に1カ所程度のがん診療連携拠点病院を指定し、地域格差が大きいがん診療のレベルを“均てん化”することが目指されています。現在こうした施策に対応すべく、都道府県ごとにがん対策推進計画が策定され、また各施設で体制を整え、人材の確保と育成に努めております。

当院でも新たに精神神経科医2名が緩和ケアチームに加わり、麻酔科医による疼痛緩和を中心とした身体的ケアとともに精神的ケアもチーム医療として行える体制を整えることができました。また腫瘍マーカー（ＰＳＡ）の測定により、発見が急増している前立腺がんの検診外来も開始します。さらにがん相談支援情報室の活動やセカンドオピニオン外来の運営経験から、これらの新たな体制でも対応できない患者さんに対して、私が「がん何でも相談外来」という全国初の相談・診療の場を設置しました。さらに患者団体の皆様が利用できるように「がん患者会活動サロン・ひだまり」も院内に設けており、患者さんとともに納得のできるがん医療を目指したいと思っております。

今後とも地域の連携施設や道庁の行政側とも協力して、実効性のある北海道のがん対策とがん診療を推進したいと考えております。よろしくご支援頂ければと思います。

北海道がんセンター
副院長　近藤　啓史

新副院長挨拶

4月より副院長を拝命しました近藤です。よろしくお願いします。医学部卒業後、元々は消化器（管）がん、専門は肝胆膵がんの外科治療を行い、最近の15年間は肺がんなどの呼吸器領域の外科治療、とくに胸腔鏡手術の開発、啓蒙を行ってきました。

今年の高齢社会白書によると75歳以上の「後期高齢者」は昨年10月１日現在で1270万人と前年より54万人増え、総人口に占める割合は9.9％と上昇したそうです。国民の10人に１人が75歳以上となり本格的な長寿高齢社会に突入したといえます。また65歳以上の高齢者も増加し、総人口に占める割合は21.5％、国民の５人に１人となったと報告されています。

一方、がんは体の細胞の老化現象と言えます。約60兆個の体細胞が何回となく細胞分裂していく中、遺伝子になんらかの傷（遺伝子異常）が付きがん化が起こると考えられています。日本の高齢化社会はまさに、国民のがん化と言えるかもしれません。男性の２人に１人、女性の３人に１人ががんになります。そして３人に１人が、がんで亡くなります。

さて北海道がんセンターは第３次の救命救急センターを併設していますが、地域がん診療連携拠点病院として、国のがん対策基本法に基づいて、がん対策を行っています。その役割は、１）専門的ながん医療の提供、２）地域がん診療連携体制の構築、３）情報収集・提供、相談支援の実施などであります。具体的に言えば、専門的がん医療とは手術・放射線治療・化学療法（抗がん剤治療）を組み合わせた集学的治療の実施、診療ガイドラインに基づいた標準、適切治療の実施、緩和ケアチーム（からだの痛み、心の痛みの両面から対応する）による緩和ケアの提供を行うこと、地域のがん診療連携体制の構築とは地域の医療機関の医師と相互に診断・治療に関する連携協力体制の整備、紹介されたがん患者の受け入れや逆紹介の実施、緩和医療の地域への提供、地域医療従事者との合同カンファレンスの実施など、また情報収集・提供、相談支援とはがん相談支援情報室での患者さんや家族からの相談に応じ、情報の提供を行い、がんの標準治療、予防・早期発見などに関する情報の提供、地域の医療機関などの情報提供、セカンドオピニオンの担当医師の紹介、院内がん登録の実施などを行っています。制度としては新しいものであるため、まだ地域の医療機関、国民の皆様への情報提供が遅れている面もあります。今後ともわかりやすい、頼りになるがん医療の拠点病院になるよう努力して参りますのでよろしくお願いいたします。

緩和ケア診療科／精神保健科

「取り組んでいる最新の治療」

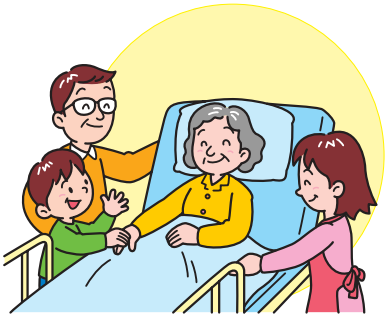
緩和ケア診療科医長　松山　哲晃

人はがんという脅威に見舞われたとき、さまざまなストレスにさらされます。死への恐怖や不安、痛みやだるさなどの身体的苦痛はもちろんのこと、患者さんによっては、それまでの社会生活で築き上げてきた人間関係を損なってしまったり、人生目標の中断を余儀なくされたり、場合によっては身近な人や医療者との関係もギクシャクしてしまったり…など。がん治療に立ち向かう患者さんは、同時にこれらのようなストレスも抱えることになるのですが、その内容も百人百様でなかなか他人に理解されずらいこともありますし、どこでだれに相談していいか分からない、そもそも相談していいことなのかどうかも分からない、という患者さんもいるでしょう。

病気の原因であるがんそのものに対する治療の進歩が患者さんの生命や健康を増進させてきたことは言うまでもありませんが、患者さんやその家族ががんと共に抱えることになる苦痛（痛みや不安など）へのケアは取り残されがちでした。数値で表される効率や実績を重んじる現代では、生命予後の延長という目に見えて明らかな成果に比べて、当事者の主観でしか量りえない苦痛というものに対する取り組みが遅れをとっているのも仕方がないかも知れません。

ですが、豊かさに“質”を求める風潮の昨今、医療においてもＱＯＬ（＝生活の質）の向上が重要視されてきており、それはがん診療に関しても例外ではありません。がんが国民の生命や健康にとって重大な課題であり続けている現状を受けて、平成19年４月から新しい法律「がん対策基本法」が施行されました。本法律はがんの罹患率や死亡率の減少を目的とするだけではなく、患者さんの「療養生活の質の向上」についても一層重視したがん対策を進めようとする方針を定めています。これに基づいて、治療の初期の段階から患者さん個々の状況に応じて、身体的苦痛の緩和とともに精神心理的な苦痛に対する心のケアを含めた「全人的な」緩和ケアを提供できる医療体制の整備が全国的に進んでいます。

このような背景から、当院はがん診療連携拠点病院として緩和ケアのより一層の充実を図る目的で、この４月より緩和ケア診療科を開設しました。



当院では以前より疼痛緩和を専門とした緩和ケアチームが活動しており、主にコントロール困難な痛みを抱える患者さんを対象として、主治医からの依頼を受ける形で治療を支援してきました。今回新設された緩和ケア診療科は、これまで身体症状の緩和に携わってきた麻酔科医師とがん性疼痛看護認定看護師に加えて、新たに精神科医師２名とカウンセリングなどを担当する臨床心理士が配属されました。これによって、がんを抱える患者さんお一人お一人の苦痛や問題に応じて、痛みなどの身体的側面、または気分の変調や悩みごとなどの心理的側面、あるいはその両面に対して、きめ細やかな緩和ケアを提供することができる体制が整ったと自負しております。

当科では、緩和ケアチームによる治療支援をより多くの患者さんにご利用いただくための窓口の役割を担いたいと考えている他、多職種からなるチームの支援までは望まれなくとも、緩和担当医師への受診のご希望がございましたら、そのような形での診療やサポートにもあたります。

緩和ケアチームによる治療の支援は、当院入院中の患者さんであれば、ご本人あるいはご家族が主治医と合意された上で受けることができます。このチームは先述の緩和ケア診療科メンバーに緩和ケア認定看護師、薬剤師２名、医療ソーシャルワーカーを加えて構成されています。また各病棟には緩和ケアリンクナースが配置され、入院患者さんと緩和ケアチームの橋渡し役を務めてくれています。

個々の患者さんが抱える苦痛に対して複数の専門職がそれぞれの視点から関わることで、患者さんご自身の身体的あるいは精神的苦痛だけではなく、治療環境や身近な方々との間に抱える問題など、療養生活を取り巻く様々な障害を解消し、患者さんが可能な限りその人らしく生きるためにサポートいたします。このような緩和ケアの充実は、疾患そのもの（がん）に対する診断・治療の進歩と互いを補い合うものであり、「（病を抱える人を）癒す」という医療の最終目標を目指す上で欠かすことのできない一翼と考えています。

なお、緩和ケア診療科に併設する形で、この４月より精神保健科も新設されました。ここではがんを患っていない方でも精神的な不調をご相談できるように、先述の精神科医師と臨床心理士が待機しております。通院治療に限られますが、こころの問題に関する一般的な診療を受けることができます。

今後も緩和ケア診療が、当院のみならず広く地域の皆様にその存在を知っていただき、そして十分に利用されますよう、努力して行きたいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

看護職者と研鑽について

看護部長　小川 ひろみ

看護職には、保健師・助産師・看護師・准看護師と称する職種があり、その免許を取得するために、看護学校（大学、養成所）で多くのことを学ぶのですが、免許を取得しただけでは、一人前とは言えません。

現在、医療の高度化・専門化が進み、複雑になってきており、それに伴って様々な知識・技術が必要となっただけではなく、国民の２人に１人はがんに罹患する時代を迎え、がんと上手につきあいながら生活している人々が増えてきており、がんという病気を抱えたことによる不安や葛藤、動揺と闘う患者さんに必要な環境を提供することも重要となってきました。

当院でも、医療安全管理室、感染対策室、治験管理室、がん相談支援情報室、緩和ケア診療科にも看護師を配置し、看護師としての経験を生かした活動が期待されており、病棟や外来、手術室といった看護単位から離れ、新たな取り組みの部署で看護師が活躍するようになりました。

このように多種多様の役割が担える看護師が現代の医療現場では必要となっています。そこで、国立病院機構では、全国にある146施設共通の看護職員能力開発プログラム（ACTｙナース）を開発し、研修を実施しています。そのプログラムに沿い、当院では、看護部教育委員会、プリセプター委員会、がん看護委員会、看護研究委員会などを設け、看護師個々の経験状況に応じた研修を企画し、実施しています。しかし、研修を段階的に受講するだけでは本当の意味での成長はできません。看護師自身が学びたい、成長したいと心から望まなければなりません。

先日、ある患者さんから「病気になったことは決して不幸なことではない」というお話を伺いました。入院したときのある患者さんとの出会いによって、このように考えることができるようになったと伺いました。命をみつめ、自分自身を支えてくれる人々とのつながりを考え抜いた末の言葉だと思いました。このような患者さんたちとの出会が、看護師の自己研鑽へ向けての大きなエネルギーになっています。夜間大学・放送大学などには、看護職者が多く占めるというのも、この現れと思っています。

「看護師等は、保健医療の重要な担い手としての自覚の下に、高度化し、かつ、多様化する国民の保健医療サービスへの需要に対応し、自ら進んでその能力の開発及び向上を図ると共に、自信と誇りを持ってこれを看護業務に発揮するよう努めなければならない。」と看護師等の人材確保の促進に関する法律に規定されており、看護師が研鑽を積むことは法令にも定められています。

Section ●セクション紹介

外来

外来看護師長　相生　洋子

北海道がんセンター通信春号発行に際しまして、外来を紹介する機会をいただきありがとうございます。当外来には、師長を含め44名の看護スタッフがいます。

『来院していただいた患者さま全員に満足していただける外来看護を行う』を外来の１番の方針として、診療科23科の医師とコメディカル看護師など病院スタッフ一同連携をとりながら、患者さまが快適にそして安全に受診または治療が受けられますように、日々努力しております。

当院は本年病院機能評価ver.5.0の受診をいたしました。ver.5.0の４領域では新たに外来部門の審査が新設され、外来の体制や看護の質などが厳しく問われましたが、先日、㈶日本医療機能評価機構より正式に認定され外来スタッフ一同ほっとしております。今後とも認定証に恥じないような外来看護を行っていこうと思っています。

当外来は、診療科23科のほかに外来治療センターと内視鏡室を受け持っております。

外来治療センターは、通院での化学療法（抗がん剤）を行う患者さまにお越しいただく場です。昨今、在院日数の短縮や患者さまのＱＯＬの向上をめざし需要はますます増えています。お越しいただく患者さまの身体的・精神的苦痛を少しでも緩和できるように、センター内はオルゴール曲を流し、治療室はすべてカーテンとパーテーションで仕切られる構造になっています。また、治療中の気分転換になりますように有線放送を聞くこともできます。外来治療センターの看護師は、各科同様に患者さまの不安や苦痛を少しでも軽くできますようにおひとりおひとり自宅での様子を聞かせていただいたり、症状や体温などを記録させていただいたりしながら、患者さま本来の生活が取り戻せますように看護を行っています。

内視鏡室は急性期から慢性期まで様々な病状の方が内視鏡検査や内視鏡下での処置や手術を受けていただく場となっています。ここでも、患者さまの身体的・精神的苦痛を少しでも緩和できるように問診や説明を十分行い、医師と呼吸を合わせて短時間に目的が終了できますように看護を行っています。また、院内でも特に感染管理には力を入れておりますので、安心して検査を受けていただくことができます。一泊入院での大腸ポリペクトミーなども行っていますのでどうぞご利用下さい。現在、各種検査のクリティカル・パスを導入しています。

次に当院で行っていますがん検診について少しお話しします。

乳腺外科外来では、乳がん検診を金曜日の午後完全予約制で行っています。婦人科外来では、乳がん検診と合わせまして婦人科検診をこちらも金曜日午後完全予約制で行っています。今年度から泌尿器科外来では前立腺がん検診を始めました。こちらも完全予約制です。いずれも、早期発見・早期治療で根治できるといわれており、少しでも多くの方が幸せであり続けるためのお手伝いができればと願っています。検診についての詳しいことは、ホームページまたは、各科へお問い合わせ下さい。

外来看護師は、病院の『顔』だといわれます。当院は玄関を入りますと吹き抜けになっており、開放的で明るいイメージの病院です。私たち外来看護師一同もそのイメージに合わせ明るく心のこもった看護ができるようにつとめていきたいと思っています。

用語解説

ポリペクトミー：ポリープ切除術
クリティカル・パス：治療計画

新任スタッフ紹介

がん相談支援情報室

地域医療連携室係長
野原　亮平

2008年４月に国立病院機構函館病院より当院「がん相談支援情報室」の係長として赴任して参りました、野原亮平です。

赴任してまだ数ヶ月しか経っていませんが、たくさんのがん患者さんやその家族の皆様が、さまざまな悩みや疑問を抱えながら治療に臨まれていることを実感しており、より多くの方に「がん相談支援情報室」を利用していただき、少しでも悩みや疑問を解消していただけたらと思っています。

また、当室には「地域医療連携室」も併設されていますので、地域全体でがんや循環器疾患の生活習慣病の診療に取り組めるよう、地域の医療機関などとの連携をより良くできるようにしていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

医療社会事業専門員
木川　幸一

2008年４月から当院２人目の医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）として勤務することになりました、木川幸一です。

これまでは、循環器科、整形外科の専門病院や老人保健施設、在宅介護分野のソーシャルワーカーとして患者さんやご家族の医療や介護、福祉の相談を担当してきました。これからは「がん相談支援情報室」での医療ソーシャルワーカーとして医療や暮らしの課題について皆様のお役に立てるよう努力していきます。どうぞよろしくお願いします。

ちなみに好きなものは旅行、歴史に関すること、サイクリング、ゴルフ（上達度とは無関係）、蕎麦の食べ歩き（美味しい蕎麦屋探し）などです。

ご来院の際はどうぞお気軽に「がん相談支援情報室」へお立寄りください。

治験 あれこれ Q&A

治験管理室 治験主任　髙橋　知宏

お薬が誕生するためには、色々な研究や試験が行われます。
お薬の候補となるものは最終段階でヒトに使用し、安全性や有効性を確認する試験を行わなければなりません。
その試験の事を「治験」と言います。
今回はその治験についての素朴な疑問を紹介いたします。

Q 治験に参加すると何かメリットはありますか？

A 治験に参加すると、通常の治療より詳しい検査を行い、綿密な治療を専門医から受ける事が出来ます。また治験薬代や治験に関連する検査が無料になる事が多い様です。そして、新しい薬を世に送り出すための創薬ボランティアとして貢献出来ます。

Q 治験に参加すると何かデメリットはありますか？

A 治験期間中の通院回数や検査が、一般的な治療に比べて多い場合があります。また期間中はアルコールを控えるなどの制限や、毎日体の状態について日記をつけて頂く事もあります。治験（試験）によっては、薬の成分を含まないもの（プラセボという）を飲む場合もあります。

Q 名前や住所などプライバシーは守られますか？

A 治験（試験）は、ＧＣＰ（医薬品の臨床試験の実施の基準に関する省令）というルールで、参加する方の人権や安全に関して厳しく定められています。カルテを含め治験（試験）に関する資料は、製薬会社の治験に関係する人や、治験審査委員会、厚生労働省などの、ごく限られた人のみの目に触れる事になりますが、参加する方のプライバシーは保護され、個人情報が外部に出る事はありません。

Q 治験に参加すると治験に関する医療費を支払ってもらえるのですか？

A 大抵の治験（試験）では初診料、再診料、交通費は自己負担となり、医師の判断でご参加頂けなかった場合でも、ご負担頂きます。治験（試験）の種類や治験実施機関により、治療費のどこまでが自己負担となるかは異なります。その治験（試験）に関する検査費用は、治験依頼企業（製薬会社）が治験薬を使用している間は負担をします。治験（試験）に関係ない治療に関しては、一般の診療料等がかかります。

Q 治験は誰でも参加できるのですか？

A 治験（試験）は、誰でも参加出来るわけではありません。治験（試験）参加には、一定の基準が設けられており、その基準を満たしていない場合や、医師の判断により、参加出来ない場合があります。

Q 副作用が出たらどうしたらよいですか？

A 治験（試験）開始前と比べて“おかしいな”と感じたら、すぐに担当医師へご連絡ください。また、定期的に検査を行った後、担当医師から詳しい説明と適切な治療を受けることが出来ます。（その場合には、ご自身の意思で参加中止を申し出ることも可能です。）副作用が生じて、治療や追加検査が必要な場合、治験依頼者（製薬会社）がその費用を負担します。担当医師が副作用とみなさない場合の検査費用等は、参加者の自己負担となります。

院内行事

栄養管理室から

Happy Birthday ～お誕生日のお祝い～

栄養管理室では昨年11月から、入院患さまを対象にお誕生日カードとケーキを用意し届けています。

当院の在院日数は27日でありますが、入院日数も１日の方から長期は６ヶ月以上と様々です。治療のため病院でお誕生日を迎える方も多く、少しでも心が和んでいただければと実施しました。当日夕食時に、食事の内容に合わせたケーキとカードを添えて召し上がっていただいています。半年経過しましたが、患者さまよりお礼のお手紙が数多く寄せられ逆に私たちが元気を頂いています。

今後も入院生活の中で心のケアに視点を置き様々なことに取り組んでいきたいと思います。

管理栄養士　小木田　香織

第28回北海道がん講演会開催のご案内について

日時：平成20年７月５日（土）午後１時30分～午後４時30分
場所：札幌エルプラザ（札幌市北区北８条西３丁目）
　　ＪＲ札幌駅北口から徒歩３分、地下鉄南北線さっぽろ駅から徒歩７分

《講演内容》

～精神科医がいる緩和ケア診療科の開設～

- からだの痛みに対する緩和ケア　麻酔科医長　岩波　悦勝
- こころの痛みに対する緩和ケア　緩和ケア診療科医長　松山　哲晃

～胃がんの抗がん剤治療のトピックス～

- ここまで進んだ抗がん剤治療　薬物療法部長　高橋　康雄
- 抗がん剤治療を併用した外科治療　外科医師　前田　好章

――― 入場無料です。みなさまどうぞご参加下さい ―――

ひだまりサロンを開催して

去る３月22日（水）10時～14時、当院４階のがん患者会活動サロンを開放しました。誰でも気軽に立ち寄り、おしゃべりできる患者サロンを目指して、当院がん患者会活動サロンに登録している各患者支援団体の代表者やボランティアが中心となって、この会を開催しました。

院内外から約30名の参加があり、交流しました。参加者からは、「同じ立場の患者さんと交流することで、また、明日から自分もがんばろうと前向きな気持ちになれた。是非こういう機会を作ってほしい。」とのうれしいご意見をいただきました。

今後、がん患者会活動サロンの活動がさらに活発化できるよう、当院がん相談支援情報室はお手伝いさせていただきたいと思います。

・お問い合わせ先・
がん相談支援情報室
直通電話（011)811-9118

診療科別外来担当医師一覧

科名＼曜日		月	火	水	木	金	備考
消化器科		高橋 康雄 中村とき子	大久保俊一 (午前)藤川 幸司	藤川 幸司 桜井 環	高橋 康雄 (午前)新谷 直昭	新谷 直昭 (午前)中村とき子	
呼吸器科	初診	原田 眞雄	中野 浩輔	福元 伸一	原田 眞雄	須甲 憲明	
	再診	須甲 憲明	福元 伸一	須甲 憲明	福元 伸一	原田 眞雄	
血液内科	初診	米積 昌克	米積 昌克	高橋正二郎	黒澤 光俊	鈴木左知子	
	再診	鈴木左知子	黒澤 光俊	米積 昌克	鈴木左知子	黒澤 光俊	
循環器科	初診	竹中 孝	蓑島 暁帆	井上 仁喜	藤田 雅章	杉山英太郎	
	再診	藤田 雅章	竹中 孝		竹中 孝	井上 仁喜	
緩和ケア診療科		松山 哲晃 岩波 悦勝	松山 哲晃 岩波 悦勝	松山 哲晃 岩波 悦勝	松山 哲晃 岩波 悦勝	松山 哲晃 岩波 悦勝	
精神保健科		近藤 千尋	近藤 千尋	近藤 千尋	近藤 千尋	近藤 千尋	
外科		濱田 朋倫	砂原 正男	濱田 朋倫	前田 好章	篠原 敏樹	
乳腺外科		田口 和典 (午前)渡邊 健一 (午後)山本 貢	渡邊 健一 (午前)山本 貢	渡邊 健一 (午前)山本 貢	田口 和典 (午前)山本 貢	田口 和典 渡邊 健一 山本 貢	乳がん検診 毎金ＰＭ
呼吸器外科		安達 大史 近藤 啓史		安達 大史 近藤 啓史	近藤 啓史 安達／有倉		
整形外科	初診	相馬 有	井須・平賀・相馬	井須 和男	平賀 博明	井須 和男	再診は原則予約 月木再診は 10：00～
	再診	平賀 博明	手術日につき予約のみ		相馬 有		
皮膚科		加藤 直子 渡邊英里香	村田 純子 齋藤 奈央	加藤 直子 齋藤 奈央	村田 純子 渡邊英里香	加藤 直子 村田 純子	
泌尿器科		永森 聡	原林 透 ～11時)永森 聡 11時～)石崎淳司	望月 端吾	永森 聡	原林 透 ～11時)望月端吾 11時～)石崎淳司	前立腺がん検診 (PSA検診) 毎水14：00～
婦人科		半田 康	(隔週)三田村 卓 木川 聖美	加藤 秀則	(隔週)三田村 卓 木川 聖美	金内 優典	婦人科検診 毎金ＰＭ
眼科		休診	休診	休診	休診	休診	
耳鼻咽喉科 頭頸部腫瘍外科		永橋 立望 山田 和之 蠣崎 文彦	永橋 立望 山田 和之	山田 和之 (隔週)田中 克彦 手術日につき予約のみ	永橋 立望 山田 和之 蠣崎 文彦	永橋 立望 山田 和之 蠣崎 文彦	
放射線科		明神美弥子 西山 典明	西尾 正道 鈴木恵士郎	市村 亘 (予約)	明神美弥子 西岡健太郎	西山 典明 鈴木恵士郎	
脳神経外科		伊林 至洋	金子 高久	伊林 至洋 (予約)	金子 高久	伊林 至洋	
心臓血管外科			石橋 義光 (再診)川崎 正和		石橋 義光 (再診)石井 浩二		
形成外科		皆川 英彦 近藤 雅嗣 (13：30～16：00)	皆川 英彦 近藤 雅嗣 (13：30～16：00)			皆川 英彦 近藤 雅嗣 (8：30～11：00)	
がん何でも相談外来		西尾 正道 (9：30～12：00)					完全予約制

※受付時間は、平日午前８時30分から午前11時までです。（土曜日・日曜日・祝日は休診です。）
※都合により代診となる場合がありますのでご了承願います。

平成20年５月１日

がん相談支援情報室

室長　近藤　啓史　副院長（併任）
　　野原　亮平　地域医療連携係長
　　木川　幸一　医療社会事業専門員
　　上田　裕美　医療社会事業専門員
　　樋口　清美　副看護師長
　　茂木　照子　看護師
　　後藤　克宣　薬剤師（併任）

顧問　小林　　博　㈶札幌がんセンター理事長
　　北海道大学名誉教授

がん相談支援情報室運営スタッフ

加藤　秀則　統括診療部長
山城　重勝　臨床研究部長
新谷　直昭　消化器科医長
太田　真澄　副看護師長
中田　友美　副看護師長
武藤記代子　副看護師長
　　がん性疼痛認定看護師
草薙　公規　診療放射線技師
松原　　勤　血液主任
松林　　聡　臨床検査技師
小木田香織　栄養士
楢舘　和則　経営企画室長
若崎　　由　庶務班長

編集後記

北海道のがん対策の基本的な考え方を示す、道がん対策推進計画が３月に策定されました。10年以内に「75歳未満のがん死亡率20％減」と「患者と家族の苦痛軽減と生活の質の維持向上」が全体目標に定められました。そのためには道内男女の高い喫煙率を下げること、早期発見を増やすことそのためにはがん検診率を50％以上にあげること、がんに対する適切治療、標準治療とくに外科治療、放射線治療、化学療法（抗がん剤治療）の三位一体の治療ができること、心と体の痛みに対する緩和ケアができることが重要となってきている。そのためには益々医療、病院の情報公開が必要である。当センターでは、がん患者の活動拠点「がん患者会活動サロン・ひだまり」が開放され、患者団体、多くのがん患者さんが気軽に立ち寄れる交流の場として期待されている。またセカンドオピニオン外来とともに、主治医から紹介状をもらえない、また専門医に診てもらいたいが主治医に言い出せない方のために、全国的に初めての「がん何でも相談外来」を５月から当センターで始めた。これらの問い合わせは、がん相談支援情報室までご相談ください。　　（副院長　近藤啓史）

独立行政法人　国立病院機構
北海道がんセンター
〔併設：救命救急センター〕

〒003-0804
北海道札幌市白石区菊水4条2丁目3-54
代表　TEL (011) 811-9111
　　FAX (011) 832-0652
ホームページ　http://www.sap-cc.org/

● 相談窓口
がん相談支援情報室
直通電話（011）811-9118
医療連携室
直通電話（011）811-9117
直通FAX（011）811-9110
メールアドレス　nohara@sap-cc.go.jp

交通のご案内

【地下鉄】　地下鉄東西線「菊水駅」下車、３番出口より徒歩３分
【自動車】　駐車場につきましては数に限りがありますので、できるだけ、公共の交通機関をご利用下さい。